作家論

佐々部清

―庶民への応援歌をありがとう―

西松　優

日本映画愛好家

映画監督の佐々部清さんが、二〇二〇年三月三十一日に六十二歳という若さで急逝された。佐々部監督の大ファンだったので私には大変ショックだった。

現在の日本映画界で〝家族〟をテーマに愛情をこめて描ける数少ない映画監督の一人だった。佐々部監督（以下、佐々部）の映画作品は十八年間で十八本が公開され、最新作一本が公開待ちである。私はそのうちかなりの作品を劇場で観ているが、今回すべての公開済作品をＤＶＤで見直してみた。

彼の映画は、多くが〝家族〟〝夫婦〟がテーマであり、その繋がりや絆を描き〝地方都市〟を背景にしているものが多い。時に〝青春〟〝友情〟〝恋愛〟〝戦争〟などがテーマであっても、〝家族〟を背景に映し出している。

佐々部の描く主人公の多くは、なにがしか悩みやハンディを持つ普通の人たちで、試行錯誤しながら頑張って一歩を踏み出していくのである。こうした人たちにやさしい視線を向けてスポットライトを当てていく。

そして、見終わると観客に〝明日〟への〝希望〟や〝勇気〟を与えてくれるのも特徴である。人間への〝愛情とやさしさ〟〝信頼と将来への期待〟を、映画の中に織り交ぜていくのである。

また、わかりやすいことも特徴である。映画は〝エンターテイメント〟であり、そのためには観客に理解してもらうことが第一と考えているようにみえる。わかりやすい上に地味で大きな起伏がなく人の感情の変化を中心に据えようとすると、ややもすると単調に、あるいは大仰でつまらない映画になりがちである。しかし、彼の映画は、細かなところまで丁寧に気を配り、巧みに伏線を張り、人間の気持ちに寄り添いながら上手く間（ま）や余白を取り、観客の想像力に委ね感動の余韻を残す。そのため、観客は自然なうちに感動に包まれるのである。

佐々部は映画監督デビューが四十四歳と遅く、下積みか

らみっちりたたき上げた苦労人である。彼の目指す映画は地味で興行力が期待できないので、なかなかデビューできなかった。しかしデビューしてから十八年間に十九本の映画を作っている。厳しい環境の映画界にあって一年に一本の割合で映画を作ることは並大抵なことではない。これは彼の能力が大きく評価されたからに他ならない。後半には撮りたい映画が制作できなくなると、自分の哲学に合う映画作りにこだわり、地方都市とタイアップしながら低予算の中で映画を撮り続けた。

私は本人とお会いしたことがないが、映画監督佐々部清という人の生き方を多くの人たちに知ってもらいたいと思う。そこで、公表されている情報と私の想像を交えて、彼の歩いた人生を辿りながら彼の映画作りの〝原点〟を探ると共に、私の好きな彼の作品をご紹介したい。

映画へのあこがれ

佐々部は一九五八年下関に生まれたが、両親は共働きで必ずしも裕福な家庭ではなかったようだ。娯楽というと白黒テレビが中心で洋画劇場やドラマを見、歌謡曲を聴いて育ち、〝大衆娯楽〟というものが知らぬ間に自分の原点になっていった。一方、小学校時代から二、三番館の映画館に一人で見に行くような映画少年でもあった。怪獣映画や加山雄三の若大将シリーズ（後期）などを観たという。

中学生になると十四歳の時『ウェスト・サイド物語』を観て感動し、入替制のない映画館で一カ月に十三回も見るほどだった。これがきっかけで漠然と映画の仕事に興味を持ったという。

テレビでは洋画劇場が全盛で、映画を解説して金が稼げる映画評論家に憧れ、淀川長治に手紙を出して弟子入りを依頼した。すると、淀川から「映画を一杯見て、大学まで行って映画と学問の両方ををしっかり学びなさい」といったことを書いた返事をもらった。大感激だった。高校時代になると、下関の上映中の作品は欠かさず見るという、映画マニアになっていた。

上京

早くから故郷を離れたかった佐々部は、明治大学文学部演劇科に入学し、念願の上京を果たした。『祭りの準備』（黒木和雄監督）を観て自分の境遇と重ね合わせ感動し、在学中に四十三回観たと語っているので、故郷への複雑な思いがあったのだろう。

仕送りをしてもらっていたが家賃を払うだけで消えてし

まい、四年間アルバイトに精出して生活費を賄った。大学時代は、アルバイトと自主映画作りと映画を観ることに明け暮れた。八ミリカメラを購入し自主映画を撮りだし、石井聰亙（現・石井岳龍監督）と知り合い、映画『高校大パニック』、『狂い咲きサンダーロード』を作る手伝いもした。しかし、自主映画では収入が少なく生活できない現実を知り、職業としてはあきらめざるを得なかった。

佐々部は映画作りの〝職人〟を目指し横浜放送映画専門学院（現・日本映画大学）への入学を決意するが金がない。そこで大学卒業後、一年間は色々な仕事に就き、昼夜懸命に働きその資金作りをした。「映画監督」という目標に向かって行動する彼の強い意志が見て取れる。そして一年後に入学するが、ここではいろいろな出会いがあった。淀川長治の授業があり、中学生の頃返事をもらったことを話すと大変喜んでくれたという。浦山桐郎監督の授業ではコンテの重要性を教わった。映画制作実習が四回あったが、彼の脚本は優れており四回とも投票で採用されそのリーダーを務めることになる。主演女優にと学院俳優コースのある女性に何度もアプローチし、そのうちに彼女の心を射止めてしまった。それが後に妻となる女性で、これが人生最大で最良の出会いだった。

蓄積の時代

学院を卒業すると、フリーの助監督となった。彼が意図したことは、二つあったと思われる。一つ目が、学院で学んだ理論を基礎に、サード・セカンド・チーフの助監督をして、現場での知識や経験を加え、総合的な能力を身につけようとしたことである。二つ目が、フリーとなって自由に仕事を選び、色々な映画監督の下で技術・手法・考え方をどん欲に吸収しようとしたことである。そのため、複数回付いた監督は渡辺祐介、崔洋一、和泉聖治、杉田成道、降旗康男などに限られる。

最初の映画助監督デビューは一九八三年の『スパルタの海』（西河克己監督）だった。しかし、不幸にもこの映画は映画のモデルが逮捕されお蔵入りとなり、公開は二十年以上後になった。

彼は、助監督をしている間にライフワークを見つけだした。〝家族〟をテーマにした映画作りである。それには複数の理由があったと思われる。

まず私生活で結婚しその後子どもが出来て家族を持つようになり、家族が自分の心の支えになり、家族を自分が支えなければいけないという自覚が生まれ、家族がかけがえのないものになったことである。そして実父の死から家族

の存在の大きさを知った。若い頃は小津安二郎監督の映画『東京物語』の良さがわからなかったが、自分の家族ができ親の死を経験し小津の家族映画の素晴らしさが理解できたと述懐している。そして、テレビドラマの『北の国から』特別篇二作品に助監督として参加した際に、〝家族〟を主題にした地味なドラマでも人を感動させることができると肌身で感じたことである。また、若い頃から山田洋次監督の大ファンであり、山田監督の家族をテーマにした映画に共感と憧憬を長く持ち続けてきたことである。

助監督の後半に、降旗康男監督のチーフ助監督を務めた頃、俳優高倉健に出会い、「何を撮るかではなく、何のために撮るか」が大事だと教えられ、その後常に意識したという。自分と同じように家族を持ち世の中で地道に努力している人がたくさんいる。そういう普通の人たちに元気と希望を持ってもらいたいと思ったに違いない。

しかし現実は厳しかった。助監督八年を経過した頃から自分の企画や脚本を積極的に持ち込みＰＲしたが、内容が地味過ぎるとなかなか採用されなかった。

一方、Ｖシネマやテレビドラマ、パチスロの監督の声がかかったが、入口でその後の進む道が決まってしまうので、経済的な安定より〝劇場映画の監督〟となることにこだわり断った。テレビの仕事がある時は、劇映画に近い二時間ドラマの仕事をできるだけ選んだ。仕事のない時には腐らずひたすら本を読み、映画を観、脚本を書き、地道に力を蓄えていった。これは家族の理解と協力がなければできることではない。経済的安定より佐々部の夢の実現に一緒に賭け苦労してくれた妻はたいしたものだ。

映画監督デビュー

二〇〇二年佐々部は東映の『陽はまた昇る』で映画監督デビューする。助監督八年の予定が十八年かかり四十四歳になっていた。東映で『鉄道員（ぽっぽや）』『ホタル』のチーフ助監督を務め、彼の陰ひなたのない働きぶり、脚本や助監督の力量、人柄を、多くの人たちが見ており、映画監督に推薦してくれたのである。

『陽はまた昇る』は左遷され斜陽事業部の長になった男が皆と一丸となってＶＨＳビデオを開発し世界規格にしていく物語である。この映画では佐々部の才能と能力が遺憾なく発揮され、感動的な人間ドラマに仕上がっている。ラストに会社を去る主人公夫婦の前での工場従業員たちの笑顔の〝ＶＨＳの人文字〟は感動的であった。それは工場の人たちを劇中丹念に描いてきたからこそ、彼らの感謝の思

いが滲み出てくるからである。この映画は、日本アカデミー賞優秀作品賞などを受賞し、彼の力量は高く評価された。

私が初めて観た彼の映画がこの作品である。会社に勤め重責を負っていた時代であったが、映画に励まされると共に主人公のような人間にはなれないと引け目を感じた。この映画を観て、初監督とは思えない手堅い映画の作りと人間への愛情に溢れた眼差しに好感を持ち、その後意識して彼の映画を観るようになった。

『陽はまた昇る』以降、彼の映画は注目され多くの作品を作っていったのである。

主な作品紹介（自分の好みを中心に）

『チルソクの夏』（二〇〇三）は佐々部のオリジナル脚本で陸上部の女子高生の淡い恋を描いた青春映画の佳作である。佐々部が今まで蓄積し描きたかったテーマを渾身の力で作り上げたもので、一九七〇年代後半の青春、友情、恋愛、親子、故郷（下関）、歌謡曲、日韓問題などが巧みに散りばめられている。私はこの映画を観るたびに、ひたむきに生きる主人公と下積み時代の黙々と努力する佐々部の姿が二重写しになる。

『半落ち』（二〇〇四）は妻殺しの警部の空白の二日間をめぐるサスペンス映画だが、原作より主人公の夫婦愛と守るべき疑似家族への愛に焦点を当て、佐々部らしく明日への希望を滲ませる。日本アカデミー賞最優秀作品・男優賞など多くの賞を受賞した。

『カーテンコール』（二〇〇五）は二つの父娘の和解の物語だが、佐々部版『ニュー・シネマ・パラダイス』で、全盛期の日本映画・映画館への郷愁を強く感じさせる。劇中挿入された多くの日本映画・歌謡曲が懐かしく、彼が尊敬する山田洋次監督の二作品もあり、私は好きだ。

『夕凪の街　桜の国』（二〇〇七）は彼の映画の中で一番好きな作品だ。前半は〝過去〟で広島の伯母の青春と恋愛、原爆症での死、後半が〝現在〟で関東に住む若い女性の主人公が父親を尾行するうちに伯母の死や自分のルーツを知り家族の絆を再発見し、〝未来〟を逞しく生きていこうと誓う。過去と現在を繋ぐものは被爆だが、佐々部らしく将来への期待に重心を置いた映画作りだ。そのため伯母の哀しさが逆に際立ってくる。

『種まく旅人　夢のつぎ木』（二〇一六）はあまり知られていない。亡兄の夢の新種〝桃〟開発を諦めかけている女性役所職員が志を失った若手農水官僚と出会い、地域の人たちとの交流と励ましの中で、互いの夢の実現に再度挑戦

しようとする物語である。シンプルだが彼のメッセージがストレートに観客に伝わってくる。

『八重子のハミング』（二〇一六）はアルツハイマー病になった妻を介護する元校長の物語で、夫婦の究極の純愛映画である。夫の献身的な介護を、娘家族の協力や地域の見守りが支えている。佐々部は原作に感動して、プロデューサー・脚本も担当し、少額化した寄付を数多く募り、地域の協力を得て低予算で作り上げた。『旅の重さ』（斎藤耕一監督）で少女役だった高橋洋子が老妻を演じるのを見て、私自身の過ぎ去った歳月を思い出させてくれた。

以上、佐々部監督を惜しみながらその足跡と私の好きな主な作品について述べてきた。

今は佐々部監督のご冥福をお祈りするばかりである。彼の公開済作品はすべてＤＶＤ化されている。遺作の『大綱引きの恋』が今後公開される予定である。

最後に大きな声で叫びたい。「佐々部監督、庶民への人生の応援歌をありがとう」

（参考文献）週刊ポスト 二〇〇八年十月三日 ／シネ・フロント 二〇〇二年六月／Ｃｉｎｅｆｉｌ 二〇一六年九月二十三日／ＷＥＢ ＭＡＧＡＺＩＮＥ ＮＯＳＶＩＳ 二〇一五年七月八日／キネマ旬報 二〇〇二年七月上旬、二〇〇五年十一月上旬、二〇〇七年八月上旬、二〇一七年八月上旬、二〇二〇年六月下旬